

ボクの
いい湯かけん

少し肌寒い4月を迎えて

なびは月一回の発行だから、いま話題の小沢秘書逮捕事件のことを論評しても時差が出てしまうので意味をなさないだろうが、それでも一言。この事件が背景に政治的陰謀を潜ませたある種の「国策調査」であることは間違いないことで、ボクは、権力にこれほど嫌われ、恐れられる小沢一郎という「壊し屋」の存在をあらためて見直した。一方で、あれほどの資金を繰る小沢政治の「孤独」にも思いを馳せた。

これに比すると小さな話だが、橋下改革からおよそ一年、ボクは、いままで経験したことのない4月、新年度を迎えた。ボクが役員を務めるA'ワーク創造館という職業教育施設、C-stepという雇用開発法人、地域就労支援センター、それからヒューマインドという福祉施設の4施設（法人）は、いったん解散あるいは大規模な縮小を経て、ほぼ「自主再建」のような形をとって4月を迎えた。少なくない仲間が職場を去り、残された者もかなりの手傷を負って新年度を迎えた。いずれも、いわゆる橋下改革の所産だ。だからと言ってボクは、橋下改革を一方向的に非難しているのではない。何故なら、ボクは、とくにこの数年、ボクが役員をしているこれらの

施設の、表向きとは違う「孤独」を誰よりも感じ、あがきもしたからだ。けっきょくボクは、小沢さんのような「壊し屋」になれないまま、橋下さんの後手に回ったことを悔いた。その手法は、小沢事件で東京地検特捜部が採った青年将校（2・26事件の）のようでもあったが、橋下さんの若さを眩しくも感じた。

春にしては時折肌寒さも織り込んだ複雑な気候のまま、4月がやってきそうだが、それは、まるで、これらの施設の行く末を象徴しているかのようでもあり、小沢さんや、長いつきあいの友人達がいる民主党の行く末ともダブって見える。少々暗く、失礼な比喻かもしれないが、むしろ、「深い味わいを醸し出し始める」というエールのつもりだ。ボクは、これらの施設の役員を降りるつもりだったが、もう一年、再生の営みにつきあってみることにした。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



苦しい状況の中でも、もう一度政権交代を目指し、民主党代表続投の決断をした小沢一郎さん

この逸曲

アナログレコードの逆襲その22
高石ともやとザ・ナターシャ・セブン「おじいさんの古時計」
アルバム「ファイルド・フォークVOL. 3 / 丘の上の校舎」から



70年ごろ、高石ともやを中心に坂庭しようご、城田じゅんじら7人の若者たちは、家族共々福井県名田庄村の廃校に生活拠点を移し、バンド名も「ザ・ナターシャ・セブン」と称し音楽活動を開始した。この頃ファイルド・フォークとして、中津川や飛騨の村落を訪れ、小学校や公民館でコンサート活動をする。その実況録音盤3枚が手元にあるが、それ以降「ファイルド・フォーク」名義で発売されたものがあったか否かを僕は知らない。

しかし、当時彼らの音楽が注目を集めていたにもかかわらず、大きなマーケットや都会に背を向け、辺鄙で彼らの名さえ知らない地方の村落に楽器をもち歩きながら巡行し、しかも小さな会場で子どもや年寄りたちと歌うスタイルに僕は共鳴した。前号で紹介した岡林信康も同時期、社会問題に見切りをつけマスメディアから去った。僕も政治や労働運動への興味のなさから、辺境を活動の中心とした前衛美術にかかわり、ファイルド・アートという気分でやっていたので、高石らの活動は同質のものだと思っていた。つまり、自分の身を置く場とは、人の顔が見えないくらい大きな場ではなく、レディメイドや同じ思考しか求めない社会規範とは距離を置く小さな共同体みたいなものにあこがれていた。方法はずいぶん、マイノリティをよしとする仲間がいる心強さを感じていた。

「ファイルド・フォークVOL. 3 / 丘の上の校舎」(75年)は、3枚の録音盤のうちでもとくに素晴らしく楽しい1枚だ。小・中学生50人ほどと父兄たちが、飛騨山之内小学校の小さな講堂に集まり、ナターシャ・セブンの演奏に合唱し、聞き入り、笑い転げながら歌う瞬間を記録したレコードだが、会場の息遣いや、演奏者たちの一挙手一動を見逃すまいとする子どもたちの視線や興味がググンと伝わってくるように感じる1枚なのだ。

アメリカのフォークロア、カントリー・ミュージック、ゴスペルなどをベースに、日本の民謡や古歌を、そして、オリジナルな曲を独自のリズムやテンポを駆使して演奏する。時には子どもや大人たちに優しく曲を投げかけながら、大きな音楽の渦を作ってしまう。観衆を自然に溶け込ませてしまう高石の言葉と卓越した音楽スピリッツに接し、僕はあんなふうに人にサービスタいと思っただけだった。中でも秀逸は「おじいさんの古時計」で、これまでに多くの歌手たちが歌ってきたと思われるが、高石のハートがこもった声量感のある、聞く者を包み込んでくれた「古時計」を、僕は今もほかに知らない。

このアルバムの表紙がボロボロになるまで、当時2歳になった息子と一緒によく聞いた。